

下坂源太郎先生記念号によせて

下坂源太郎先生は本年三月をもって、立教大学を定年退職されました。先生は現経済学部の前身である立教大学商学部を昭和三年に卒業され、さらに東京帝国大学およびロンドン大学に学ばれたのち、昭和十二年に母校である本学に就任、以来今日まで三十三年間にわたり、本学のためにつくされました。

先生の就任された昭和十二年当時は経済学部において、資料室の設置、研究室の整備および演習制度の確立、また翌年には『立教経済学研究』の創刊など、今日の研究・教育体制の基礎がつくられた時であります。先生はこのような経済学部の刷新の時に迎えられたわけですが、その後の本学の、そしてまた経済学部の歩みは順調であったとはいえません。強められてゆく戦時体制の中にあつて、立教大学がミッション・スクールであり、自由の学府を標榜しているがゆえに、その存立さえ危くされるような状態に追いこまれてゆきました。こうした中に、学院当局の苦心のもと、戦争末期に理科専門学校が設けられるや、先生は経済学部教授として工業経営科長となられ新設学科の運営に活躍されました。また戦局の悪化につれてきびしくなつてゆく学徒勤労動員の責任者として、学生と大学を守るために大きな貢献をされました。

戦後の混乱期からの再建にあたつて、先生は経済学部教授として学部の再建に、また大学の各種委員として学内の充実と、また同窓（校友）課長として大学と校友を結ぶ重要な機能を果たされました。

先生は経済学部の専任として保険論を担当されると同時に、他学部学生への経済学の講義を受け持たれ、多くの学

生を啓発されてこられました。そこにみられる先生の終始変わらぬ学問的信念と温厚なる人柄、ことに何事によらず無私に徹した態度は、接したことのある学生にはよき師としての感銘を与えられたことと思います。またわれわれにとっては、大学人のあり方を無言の中に示されたものといえましょう。

われわれは先生が本学を去られるにあたり、先生の長年の本学への、ことに経済学部への貢献と御指導とにたいする感謝の一端をあらわすため、本号をもって先生の記念号といたしました。先生がこれからもお元気に過ごされますよう、できれば今後ともわれわれのため、御指導の機会を与えられますことをお願いいたします。

昭和四十五年秋

経済学部長

宮川宗弘